

---

# 無 - 駄為

御神楽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無 - 駄為

### 【Nコード】

N2582BA

### 【作者名】

御神楽

### 【あらすじ】

自作短編小説です。他サイトにも投稿しております。

意識が覚醒する。

いつものように起きる。

繰り返してきた日常は、今日も変わらないままだ。

窓から覗く空を仰ぐ見る。

太陽は燦々とコンクリートに包まれた街を照らしていた。

どっからどうみても、昼は過ぎている。

まあ、気にすることはない。これもいつものことだ。

季節は夏。

狭いボロアパートの一室は、夜とは別世界のように暑い。

悲しきかな、それが俺の住む部屋だった。

けれど、ここに住むのは俺だけじゃない。

もう一人、俺の恋人が住んでいる。

ていうか、隣で寝てる。

俺達が出会ったのは大学時代。なんてことのない出会いだ。

たまたまクラスが一緒に、たまたま同じ授業をとって、たまたま気が合ったただけだ。

普通のどこにでもありそうな、どうでもいい出会い。それが俺とこいつの馴れ初めだ。

俺は部屋の蒸し暑さから解放されるべく、布団から転がるようにして窓を全開にした。

多少、風が入ってきたが涼しいとは言い難い。しかし、汗の滲んだシャツに風があたりそれだけは涼しく思えた。

すこしだけ生き返った想いをした後、上体を起きあげた。

まだチアキは寝ている。

よくこれだけ暑いのに寝ていられると、心底感心した。

もとよりこいつはこいつ奴だが……。

俺、いや俺達は大学を卒業した後、無事就職を果たした。

勤めた企業は、名前すら聞いたこともない中小企業。チアキも似たような会社だった。

本来ならば、今頃会社でキーボードを叩いていたはずだ。

けれど、俺は会社を辞めた。自ら辞表を提出した。

勤めてたったの二か月。

周囲からは、根性なしと罵られたが言い訳させてもらえるならば上司が悪かった。

俺の上司、教育係というべきか。その人は見た目、狸のような人間で中身も同様に狸だった。

ただそれだけだ。具体例を挙げればキリがない。もともと、働く意欲に溢れていたわけでもないし、後悔はしていない。

ただ、驚くことにチアキも俺を追うように会社を辞めた。

自ら辞表を叩き出して、だ。なにか訳があつたわけでもなく、俺が辞めたから辞めたらしい。

正気とは思えなかったね。前から、変な奴だとは思いつけてきたけどどこまで異質だと逆に愛着が湧く。

そんな理由で俺はこいつとの関係を続けている。

そんな俺達は、とりあえず生きていけるだけの金をバイトで捻出し生きている。

変わらない毎日、そのほとんどをこの部屋で生きている。他人との接点はたった数時間のバイトの時だけ。

それも週に三日だけだ。それ以外はオフ、つまり暇だ。そんな日は、一日中チアキと交わることしかすることがない。

普遍で、不偏の、不変な世界。そんな地獄にも天国にも似た世界を俺達、否、俺だけが生きている。

ただ、完結していないことだけが救いだつた。

「はっ……、笑える」

思考の海から浮上する。

まったく莫迦らしいほどに、馬鹿らしい。

くだらないことこの上ない、まさに戯言の他の何物でもない。

とりあえず、いつも通りチアキを起こそう。

一人では暇で退屈だ。なによりも虚しい。

チアキの肩を揺さぶる。起きない。

さらに力を込める。起きない。

もっと力を込める。頭が左右に激しく揺れているというのに起きない。

相変わらず、すげえ奴だった。

こうなれば最終手段。こいつに対するリーサルウェポンを使用するしかない。

俺は、ゆっくりと手をチアキの顔面に持っていく。そして、やさしく鼻をつまんだ。

「……………っ、っ、っ」

こいつの弱点。それは寝ている時はなぜか鼻でしか呼吸をしないことだ。

いかなる状況に陥ろうとも、寝ている時に口で息をしないのだ。

だから、当然鼻をつまめば呼吸ができなくて起きる他ない。まあ、過去それで意識を失ったこともあったけど。

みるみるうちに顔面が青くなっていく。

そろそろ危ない、と思ったところで鼻を開放した。

途端、激しく呼吸をするチアキ。しかし、やはり口ですることはなかった。

鼻をヒクヒクさせて懸命に息をする。犬かおまえは……………。

やがて、ゆっくりと瞳が開かれた。

呼吸はどうやら落ち着いたようだ。チアキは欠伸を噛み締めながら、目を擦る。

そして、暫く放心。これもまた俺の日常の一幕だ。なぜかこいつの仕草だけは見飽きる事がない。

不思議なもんだ。けど、だからこそ、こいつに惚れたのかもしい。とこの頃よく考える。

と、そこでチアキは活動を開始。

隣に俺を見つけ、すぐさま跳びかかった。

俺の首に引っ付くと耳元で囁いた。

「ハルキ、えっちいことしようぜえ」

開口一番これだ。こいつの思考ルーチンはどうなっているのか、一度見てみたいもんだ。

だからといって、俺に拒む理由なんか無い。当たり前のように承した。

俺が肯定の意を示すと、チアキはその体勢のまま俺の耳に噛み付いた。

強くもなく、弱くもない。そんな絶妙な力加減で噛んでは放し、噛んでは放しを繰り返す。

別に俺は耳が性感帯なわけではない。単にこいつが耳フェチなのだ。

それにも飽きたのか、顔を正面に持ってくる。

起き抜きの潤んだ瞳を俺に向ける。それがなにを求めているか、俺は瞬時に理解した。

ゆっくり、緩慢な動きで唇で唇に触れた。柔らかく、そして温かい。

ただ触れるだけのキス。俺達はそれをし続けた。

俺は手をチアキの下半身から這うよう伝え、汗ばんだシャツの間隙に滑り込ませた。

そのまま脇腹を撫でる。それだけでチアキの口から吐息が漏れた。漏れた吐息を唇で塞ぎ、開いた口に舌を潜り込ませた。

「うん・・・、んは・・・、んん」

口内を舌で犯すことに、チアキは感じていった。

そして、もっと快楽を求めるように首に回した腕の力を強めた。

俺はディープキスを続けながら、シャツに潜り込ませた手を繰る。

脇から背中に這わせ、一周させるように乳頭を刺激した。

「あっ・・・、んあ」

僅かにチアキの体がビクッと反応する。

その反応を見た俺はいつものように、つまんだり、引っ張ったり、弾いたりを繰り返す。

みるみるうちに乳頭は固くなっていった。それを確認すると、俺は

シャツをたくし上げた。

抱きついたチアキを横にして唇を口から離し、首を、腕を、腹を、臍を、その肢体を舐め回す。

「ああ、うん・・・、はあ・・・、ん、あっ・・・くう」

チアキはその快楽に悦楽していた。

俺はただ坦々と作業のように続けた。

やがて、チアキはその先を求めた。当然だ。

当たり前で、自然なこと、いつも通りだった。

俺は交わるために身体を寄せる。そこで、ふと躊躇った。

また“いつも通り”に続けていいのか、と。

いつものように快楽に身を任せるだけでいいのか、と。

何も変わらず、何も変えずに、怠惰に生きていいのか、と。

チアキを見る。

きつとこいつは、ここでやめても何も言わないだろう。落胆することも、憤慨することもないだろう。

こいつはいつも俺に合わせる。いつだって、どんな時だって。それがこいつで、こいつだからこそだ。

止めるべきか、已めないべきか。

変わるべきか、代わらぬべきか。

生きるべきか、逝きないべきか。

決断は時間が経てば経つほど、鈍っていく。

時間というのは厄介なものだ。不変な時間などなく、代わり続け、其れで尚且つ有限だ。

しかし、人類にとっては必要不可欠な概念だ。もしも時間という概念がなければ、誰も俺のように生きるだろう。

閑話休題。

結局、俺は流される。

決意なんて、そんなものだ。覚悟なんて、そんなものだ。

ましてや、今思い立った気持ちなど些細なことではない。

俺は流される、否、流れる。

流れに流されるままに身を任せる。

やがて、辿り着くのは海原だ。快樂と悅樂の海だ。

俺はこれからも生き続ける。

無為に、無駄に、無意味に、ただ只管に。

当たり前の世界を、変わらない世界を、いつも通りの世界を　　逝  
き続ける。

終わらない

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2582ba/>

---

無 - 駄為

2012年1月6日16時48分発行